

あひまちゅら

2017.08.31 THU - 09.04 MON
下北沢 駅前劇場

お祭り やっってる らしいよ



祭囃子が聞こえて
くるかもしれない
駄弁芝居70分。

(脚本・演出) 関村俊介

(出演) 長津茂西 / 森本美帆 / 田代高子 / 野村梨々子

上植コナン(あらし) / 澤唯(ヤマカド) / 園田裕樹 / 藤崎明 / 松本美鈴子 / 宮本奈津美(はわい宝々)

登場人物

203号室

カワモト

オオツキ

204号室

コバヤシ

トクナガ

ミノベ

妹 兄 姉
201号室
ナイトウ
サナダ
202号室

203号室。テーブルとイス2つ。

オオツキは座っている。

カワモトは浴衣を着て立っている。

川本 お祭りやってるらしいよ。

大月 そう。

川本 お祭り、やってるらしいよ。

大月 そう。

カワモトはオオツキを見ている。

大月 行ってくれば？

川本 えー？

大月 いや、行きたいんでしょ？

川本 そうでもないけど。

大月 そうでもない人の服装じゃないよ？

川本 え？

大月 浴衣まで着てさ、お祭り行く気まんまんじゃない。

川本 本当に、そんなには行きたくないよ。

大月 あっそう。

川本 でも、オオツキが行きたいなら、行ってあげてもいいよ。

大月 俺は別に行きたくない。

カワモトはとっても悲しい顔をする。

大月 行きたいんだよね？

川本 別にそんなでもないよ。

大月 今、すげえ悲しい顔してたじゃん。

川本 してた？

大月 してた。

川本 おかしいなあ。

大月 1人で行けばいいじゃん。

川本 別に行きたくないんだよ。

大月 ならいいけど。

川本 ねえ。

大月 なに？

川本 お祭りやってるらしいよ。

大月 だからさあ。

川本 なに？

大月 行けばいいじゃん。

川本 行きたいの？

大月 俺は行きたくないよ。

川本 でも、少しは行きたいよね？

大月 いいや、全く。

川本 どうして？

大月 えー？

川本 ねえ、どうしてなの？

大月 だってさあ。

川本 焼きそばも売ってるよ？

大月 売ってるだろうね。

川本 だったら行きたいでしょ？

大月 いや別に。

川本 焼きそばがあるんだよ？

大月 うん。俺、焼きそばが大好物とか言ったことある？

川本 ないよ。

大月 ないよね。

川本 それが？

大月 じゃあ、焼きそばがあるからってお祭り行きたくはならないでしょ。

川本 焼きそば嫌い？

大月 嫌いではないけど、大好物でもないからさ。

川本 私が麺類の中で一番好きな物はなんでしょう？

大月 ん？

川本 私が、麺類の中で一番好きな物はなんでしょう？

大月 焼きそばなのかな？

川本 私が麺類の中で一番好きなのはね、担担麺。

大月 ちよつと話が見えないな。

川本 焼きそばは二番目。

大月 ああ、そういうこと。

川本 あんかけのやつね。

大月 あ、また話が見えなくなったね。

川本 オオツキは麺類の中で、何が一番好き？

大月 ラーメンかな。

川本 二番目は？

大月 蕎麦だね。

川本 三番目は？

大月 うどん。

川本 四番目は？

大月 スパゲティ。

川本 五番目は？

大月 ねえこれ何番目までやるつもり？

川本 焼きそばが出てくるまでだよ。

大月 だと思っただけ。焼きそばは…八番目だよ。

川本 それはあんかけのやつ？

大月 いや、ソース味のやつ。

川本 お祭り行けば売ってるやつだ。

大月 そうだね。

カワモトはオオツキを見ている。

大月 行かないよ？

川本 ねえ、どうして？

大月 …それはあれなの？もしかして仲直りしようみたいなこと言ってるの？

川本 え？

大月 まだ2時間前くらいだと思うけど、さっき喧嘩したよね。

川本 そうだね。

大月 だから仲直りしようみたいなあれで、お祭りに誘ってくれてるわけ？

川本 違うけど。

大月 違うのかよ。

川本 だって私はお祭りに行きたいわけじゃないんだから。

大月 あっそう。

カワモトはオオツキを見ている。

大月 : 友達とか知り合いとかに聞いてみたら？

川本 なにを？

大月 お祭り行きたいかどうか。

川本 なんで？

大月 行きたい人がいるかもしれないじゃん。で、もしいたら、一緒に行つてあげたらいいんじゃない？
川本 お祭りなんか、友達とか知り合いと行つてもそんなに面白くないでしょ。

大月 さっき喧嘩したばかりの人と一緒に祭り行くほうが絶対面白くないよ。

川本 いやいや面白いよきつと。喧嘩中だからこそ、微妙な気まずさと、祭りの浮かれた空気がミックスされて、味わい深い空間がそこに生まれるでしょ。

大月 独特の感性。そういうところなんだよなあ。

川本 そういうところ？

大月 いや、いいや。とにかく俺は行きたくないから。俺以外の誰か、お祭りに行きたい人を探しなよ。

川本 誰かって誰？

大月 知らないけどさ。

川本 : ねえ、良く考えて。

大月 え？なに？

川本 今の話の流れからすると、友達や知り合いとはお祭り行かないよね、私。

大月 そうだね。

川本 家族が近所に住んでないことも知ってるよね。

大月 知ってるね。

川本 となると、私、お祭りに、赤の他人と一緒に行くことになるよ？

大月 …。

川本 おかしくない？

大月 おかしいね。じゃあ、やっぱり1人で行くしかないね。

川本 私、別にお祭り行きたくないからなあ。

大月 あのさ、そろそろ認めてほしいんだけど。

川本 なにを？

大月 カワモトは、本当は、お祭りに行きたいんだよね？

川本 …本当に、行きたくないよ。

大月 本当？お祭り行きたいとしか思えないんだけど。

川本 本当だよ。嘘だったら目ん玉くり抜いてもいいよ。

大月 じゃあ、信じるけど。

川本 ねえ。

大月 なに？

川本 お祭りやってるらしいよ。

大月 …怖ええよ。ここまでするときさすがに怖ええよ。

川本 なにが？なんで？

大月 それをずっと言ってくる意味がわからないからさ。

川本 意味？

大月 お祭り行きたいわけじゃないのに、それをずっと言ってくる意味がね、わかんないから、怖い。

カワモトは目ん玉をくり抜こうとする。

川本 くり抜けないなあ。

大月 やめてやめて。

川本 ねえ。

大月 なに？

川本 お祭りやっってるらしいよ。

転換。

204号室。コバヤシはちやぶ台に座ってヘッドフォンをして、テレビゲームをしている。それを見ているトクナガ。

徳永 あのさ。

小林 え？

ヘッドフォンを取れ、と動きでやるトクナガ。

コバヤシはOK的な感じを出す、ヘッドフォンは取らない。

小林 なに？

徳永 取れよ。

トクナガはコバヤシのヘッドフォンをむしり取って。

小林 あ、終わってたか。

徳永 なにが？

小林 や、なんかさつき隣の部屋の人が喧嘩しててさ。それでヘッドフォンしてたの。

徳永 あ、そう。

小林 で。なに？

徳永 ああ。あのさ。

小林 うん。

徳永 なんでそこに座ってんの？

小林 え？

徳永 それちやぶ台じゃん。

小林 そうだね。それが？

徳永 それって、座る物じゃないじゃん。

小林 でも、ちょうどいいんだよ、高さが。

徳永 ん？

小林 座ってみればわかると思うけど。ゲームするのにちょうどいいんだよ。

徳永 そうなんだ。

小林 画面の高さと視線のバランスがちょうどいいの。

徳永 そう。

小林 座ってみる？

徳永 え？

小林 座ってみればわかると思うから、このちょうど良さ。

徳永 いや、いいよ。

小林 あっそう。…やっぱり座ってみてほしいなあ。

徳永 なんでだよ。

小林 わかってほしいんだよ、このちょうど良さ。

徳永 どうでもいいから。なんとなくわかるし。

小林 こんなちょうどいいことある？

徳永 知らんけど。

小林 こんなちょうどいいことある？って思うよ？

徳永 それはわかったよ。

小林 だから、トクナガにも体験してほしいわけ、こんなちようどいいことある？を。

徳永 うん。それは、コバヤシにとっての話じゃん。

小林 え。

徳永 俺とおまえは、身長とか座高とか違うわけだから。

小林 そんなに違うないだろ？

徳永 そうなんだけど、ちよつとは違うわけだから、こんなちようどいいことある？ってならないと思うんだよ。

小林 なんで？

徳永 いやいやいや、だって、そんなにちようどいいっていうのはさ、ミリ単位で、こう、ジャストフィッとしてるみたいなことだと思うわけ。あー。めんどくさい。どうでもいいんだ、ちようどいいとかは。

小林 感動すると思うんだけどなあ。

徳永 そんなことよりね、そろそろ言うね。

小林 なに？

徳永 ここ俺んちなんだよ。

小林 そうだね。

徳永 そのちやぶ台も俺の物なのね。

小林 そりやそうでしょ。

徳永 じゃあ座ってんのおかしいだろ！

小林 そうだよね、ごめんごめん。

と謝ったが、コバヤシは立たない。

徳永 …立たねえのかよ。

小林 俺だつてさ、ちやぶ台になんか座りたくないよ、マナー違反だもん。

徳永 うん、座りながら言うな。

小林 常識的に考えて、ダメってことはわかってるわけ。

徳永 だから座りながら言うな。

小林 でもさ、こんな

徳永 ちようどよくてもね、おかしいでしょ、座ってんの。

小林 …そうか。そうだよね。

コバヤシは立ち上がったが、ゲームはやめない。

徳永 …やっぱいいや座ってて。

小林 え？なんで？

徳永 立ってゲームをしてる人を見るほうが嫌だったわ。

小林 そう。

徳永 ていうか、ちやぶ台に座ることに関しては実はそんなに問題ない。俺もたまに座ってるし。

小林 そう。でもマナー違反だよな。

徳永 うん。そうだけど、それもどうでもいい。俺が、本当に言いたかったことを言うね。

小林 なに？

徳永 いつまでいるんだよ。

小林 え？

徳永 そろそろ帰れよ。

小林 もしかして迷惑だった？

徳永 そんなに迷惑ではないんだけど。さすがにいつまでいるんだよ、ってなるよ？

小林 俺、どれくらいここにいます？

徳永 あのね。…わかんない。もう俺にもわかんない。

小林 だよな。

徳永 だよね、じゃねえのよ。

小林 そんなに迷惑ではないんでしょ。

徳永 とはいえよ。おかしいじゃない。

小林 人は誰しもさ、青春時代にそういう時期があったりするじゃん。

徳永 俺はなかったし、今はもう青春時代ではない。

ミノベが部屋に入ってくる。コンビニ袋を持っている。

美濃部 おいっす。

小林 おいっす。場所すぐわかった？

美濃部 ああ、建物は。間違っって一回違う部屋に入っちゃったけど。

徳永 誰だよ。

小林 ああ、ミノベ。

徳永 うん、それは誰だよ。

美濃部 あ。…ミノベです。

徳永 ミノベわかってんだよ。誰なんだよ。

小林 誰っって言われてもなあ。

美濃部 赤い髪の毛は情熱の証。好きなパンはカレーパン。埼玉県和光市が生んだ、メガネをかけたおじさん、ミノベこと、ミノベタカヒサです。

徳永 アイドル風の自己紹介をされても、情報薄くて全然わかんないです。

小林 友達だよ、俺の。

徳永 だろうけどさ。

美濃部 あ、おじゃまします。

徳永 遅えよ、おじゃまします言うのが遅えよ。

美濃部 パン食べます？

徳永 パン食べないです。いきなり知らない人がくれるパンは怖くて食べられない。

小林 会うの初めてだったっけ？

美濃部 そうだね。

小林 そうだったか、あれがトクナガね。

徳永 ねえ、なんでそういうことしちゃうの？

小林 え？

徳永 なんで俺の家にミノベを呼んじやうの？

小林 もしかして迷惑だった？

徳永 迷惑だよ、知らない人が来ちゃうのはさすがに迷惑だよ。

美濃部 繊細なんですね。

徳永 すみません、出てってもらえます？

美濃部 いや、でも。

徳永 ここ俺の家なんで。

小林 今、いいところでさあ。

徳永 なにが？

小林 ゲーム。

徳永 知らねえよ。

小林 俺もさ、これ終わったらさすがに帰ろうと思ってたんだよ。

徳永 あ、本当に？

小林 うん。

トクナガは画面を見て。

徳永 ああ、それやってんだ。どこまで進んでんの？

小林 主人公の村に伝わる伝説の剣の話聞いたところ。

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

お祭りやってるらしいよ（おためしサンプル）

2017年8月27日 初版発行

2017年8月30日 改訂（ver.2.000）

著 者 関村俊介 © 2017年

発行者 石村寛之

発行所 有限会社レトロインク

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7

電話 0422-24-9529
